

詩編8編2-10節

●聖書には「安息」へと人を導く神の姿、そして教えが何度も出てきます。詩編23編には「主は私を青草の原に休ませ…魂を生き返らせてくださる」とありますが、これは逆に言えば休む事がなければ人は靈的に飢え渴いてしまうという事実を告げているのです。しかし、私たちは往々にして「休む」ということが苦手です。先進国では「休暇」よりも「働く事」を好む傾向にあると言われます。人間には「働く自分」に価値を置く傾向があるからです。ただ、私たちが人生の価値をそこにのみ置くなれば、私たちが病気や失業、高齢を迎える時、容易に自分の価値を見失います。今朝、私たちは聖書が告げる「安息」の意味を共に考えたいのです。

●今日の詩編8編で詩人は「月も星もあなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何者なのでしょう。人の子は何者なのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。」と賛美しています。この「人」(エノシュ)は、儂く弱い存在を指し、「人の子」(ベン・アダム)は土の塵にすぎない存在を思わせます。つまり詩人は、創造主なる神が、弱く罪深い存在である自分をそのまま愛し、顧みてくださっている事に大きな驚きと喜びを見出し、賛美したのです。

●この詩は「夜の賛歌」とも呼ばれています。詩人はきっと様々な不安や恐れ、向き合う課題が山積みのこの世の一日の歩みを何とか終え、ふと夜に天を見上げてこの賛美を歌ったのでしょう。その時に詩人は欠け多き自分を知らされると同時に、その自分を深く愛する神の愛と配慮に目が開かれ、限りない平安と希望を与えられたのだと思います。

●2節後半の言葉は新しい翻訳では「あなたは天上の威厳をこの地上に置き…」と訳し直されています。これはイエス様がこの世に与えられたことを思い起こさせます。当時、熱心なユダヤ人達は神の戒め「律法」を守ることに最大の価値を置きました。しかしその結果「律法主義者」を生み出し、そこに神の平安と満足は与えられませんでした。そんな世の中に真の休息を与えるために与えられたのがイエス様だったのです。

●親にとっては、子どもが頑張る姿と共に平安に眠っている姿を見る事もまた大きな喜びです。神さまにとっても同じなのではないでしょうか。様々な課題や問題のあるこの世にあって時に病や疲れを覚えたり、境遇に恵まれない状況を経験したりする私たちですが、そんな私たちを深く労わり、救い主を与えてくださった神の偉大な恵みに共に感謝する聖日となればと願います。